

虹の架橋

今月の題字 庄司政史さん

(静岡県御殿場市)
ジョイ会という勉強会仲間の庄司さんは、地ビールやイルミネーションなどで有名なりゾート施設「時之栖」の社長さん。10数年からの『虹の架橋』のありがたい読者です。

二日から窪塚書道教室作品展

足利屋では、今年も大間々町の窪塚英華書道教室の作品展を開催いたします。(二日、二十九日)作品は十一月に富山県で開かれた第五十七回日本北陸書道院展で院賞や特選を受賞した力作ばかり。作品は小学一年の両角菜里さん。小学三年の齋藤奈津子さん。小学四年の遠坂斗明さん、園原天胤さん、両角武琉さん。小学五年の森陽依さん、永井大翔さん、大石悠衣菜さん、辻口結愛さん。小学六年の諏訪花怜さん。中学二年の諏訪陽南さん。中学三年の両角知紗さん。高校二年の櫻井花香さんの十三点。



それぞれの作品には書いたときの感想がていねいな字で書かれています。「『り』を書くのがむずかしかったけど『い』と『ろ』がうまくできました」(両角菜里)。「草の字を一番大きくしました。さわやかな感じをイメージして書きました」(森陽依)。「『力』が上手に書けなくて苦戦しましたが、がんばって書きました。これを機に自分の地元の郷土の魅力について調べようと思います」(諏訪陽南)。「最後に根気よく書き込んだため『院賞』というすばらしい賞をいただくことができました。最後までエールをかけ、教えて下さった先生、本当にありがとうございました」(両角知紗)。「初めは書いていた字が全体のバランスを直していくうちに一つの字のバランスが悪くなったり、とても苦戦しましたが最終的に納得のいく字になりました」(櫻井花香)。



小耳にはさんだ

いい話
(文責・靖)
《329》

清瀬市に住む友人のご好意で、毎月『生命尊重ニュース』という冊子を読ませてもらっています。その十二月号には「ありがたいとは思議な言葉」という木村悠方子さんのいい話が載っていました。

木村さんは「今は科学が発達して、言葉の波動の低い高いが測れる波動測定器ができました。波動数の低い言葉は、不平・不満・愚痴・悪口・文句・ついてない・心配・許せない等の思いを表す言葉です。嫌な言葉を発したり言われ

『これでいいのだ』

それだけの作品には書いたときの感想がていねいな字で書かれています。「『り』を書くのがむずかしかったけど『い』と『ろ』がうまくできました」(両角菜里)。「草の字を一番大きくしました。さわやかな感じをイメージして書きました」(森陽依)。「『力』が上手に書けなくて苦戦しましたが、がんばって書きました。これを機に自分の地元

たりすると、気が落ち込みますね。波動免疫力も運氣も下がります。そして、嬉しい言葉、ありがとう・感謝します・大丈夫・幸せ・大好き・満足・ついていて愛していますという言葉は波動が高い言葉です。波動測定器で測定すると30前後あります。反対に波動数の低い言葉の代表のような、怒る・困った・悲しいと悩んだり、苦しい・怖いなどの言葉は3か2しかありません。10以下の言葉は思わない、使わないようにしましょう。波動が高い言葉・嬉しい言葉を使う方が自分の波動や免疫力を上げ、心も穏やかで明るくなり、より一層多くの方に笑

世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の絵《329》

野口智子さん 『絆』



毎年秋に開催している『ながめ公園周辺自主清掃』に初参加した水彩画家の野口智子さんが横一メートルもある大きな絵を描いて届けてくれました。絵の中には百人以上の人たちの顔。ながめ余興場や菊の五重塔、太鼓橋、大間々駅のトイレまで描かれています。野口さんは「次々と駐車場に集まってくる人たちが、朝日に照らされた木々、どんどん集まるゴミ袋がサンタさんのプレゼントのようでした」と言っていました。絵の真ん中には「凡事徹底」の文字も書かれています。この絵を見て『絆』という言葉が浮びました。

顔を差し上げることができず。和顔施です。バカボンのパパの口癖の「これでいいのだ」は、波動数38と高く素晴らしい言葉です。「これでいいのだ」は「すべてをありのまま受け入れる」というお釈迦様の姿勢にも沿っており、悟りの境地をある意味示していると言われています。又、バカボンという名前も薄伽梵(ぼぎやぼん)、つまりは仏に由来しているとも言われています。「これでいいのだ」は、全ての出来事、存在をあるがままに前向きに肯定



「ありがたい」を自分の年齢×一万回唱えろと人生が好転するそうです。新しい年を迎え、これから一年、「ありがたい」と「これでいいのだ」を口癖にして、人生がさらに好転することを目指したいと思えます。

し、受容れることです。それによって人間は『陰』の世界から解放されます。

靖ちゃん日記

今年四年十二月十日(五)
なごめ余興場で「百年後まで語り継がれる創生落語会」を聞き、おじり市内の山・中学生に呼びかけて、親子で落語を楽しんでもらう。今年六年目となる「おじり市創生活話」は、郷土の偉人や歴史を落語にして後世に語り継ごうというもの。三浦孝篤落語さんは「大間々あきんど物語」を熱演。明治二十八年四月二十六日に大間々で起こった大火の際、四丁目の岡商店の醤油八十五石を蔵から出して火を消し止めた、という史実を身振り手振り交えて語っていた。百三十年も昔の話。百年後まで語り継がれたら嬉しくなる。落語の中で醤油で火を消す前に所内の連中が寄り集まって相談。「男左ち火の前は横一列に並んで、一斉に自分のホースを出して火を消そうじゃねえか」「そんなホースじゃとて無理」という珍(チン)問答に大笑いした。自分のホースも昔の勢い外るく存することには気がついた。

年末に届く喪中ハガキが年々多くなりました。大切な家族や姉弟を亡くした方の一人一人のご心中を察すると心が痛みます。喪中ハガキを頂いた方には、年賀状の代わりに喪中ハガキの返礼ハガキを送り、弔意を伝えることにしています。近年は、終活に伴う「年賀状じまい」や会社関係でも、形式的な年賀状を廃止する動きも多くなりました。ネットなどの普及で年賀状の意味が薄れてきたのかもしれない。でも、相手の顔を思い浮かべ、自筆で一言添えた年賀状を出せる喜びや、もらった時の嬉しさは正月ならではの楽しみです。

「ありがたい」を自分の年齢×一万回唱えろと人生が好転するそうです。新しい年を迎え、これから一年、「ありがたい」と「これでいいのだ」を口癖にして、人生がさらに好転することを目指したいと思えます。



虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百二十号は令和五年二月一日(水)発行予定です。

やっちゃんの似顔絵提供…ひさかさん